

ディケンズ・フェロウシップ日本支部ニューズレター

今年の春季総会は6月20日（土）に西南学院大学（福岡市）で開催されました。ぐずついた天気週末となる予報でしたが、能天気な支部長が晴男としての実力をいかんなく発揮し、会員の皆さまの日頃の行いもよろしかったようで、当日の天気は時には薄日もさすほど回復し、ほとんど傘のお世話にならずにすみました。

総会では、まず議事に先だち、先月14日に逝去された会員で元日本支部長の原英一氏のご冥福を祈り、1分間の黙祷を捧げました。

今回のプログラムは、事前に想像していた以上にとっても濃い内容のものになりました。まず最初に、西南学院ご出身の作家で、2024年に芥川賞を受賞された鈴木結生（ゆうい）さんに「ホワット・ザ・ディケンズ！——ディケンズの愛読者たち」というお題でご講演いただくというたいへん貴重な機会に恵まれました。鈴木さんは、ご自作の『携帯遺産』とディケンズとの関りも盛り込みつつ、ご自分で選んだ数名の作家がディケンズ作品にどのように接したか、日記や対談などの資料から丹念に彼（女）らの声を拾い上げてくださいました。大江健三郎がディケンズを愛読していたのは知っておりましたが、アンネ・フランク（厳密には彼女のお父さんのオットー）、ヴァージニア・ウルフ、そして村上春樹までもがディケンズとしっかりつながり、その魅力について重要な証言を提供してくれてたなんて！鈴木さんは最初に〈私はディケンズをはじめとするヴィクトリア朝の小説はあまり得意じゃありませんでした〉なんておっしゃりながらも、てらいのない親しみやすい語り口で、実に刺激的なお話を展開してくださったと思います。ディケンズの最もディケンズらしいところを巧みにあぶり出すだけでなく、彼の作品が実人生にもたらす独自の疑いえない効用——人を活かし癒す力——についても指摘してくださいました。ご講演中、ディケンズ作品からの直接の引用はなかったと思うのですが、聞いているうちにディケンズの文章がこの上なく愛おしく懐かしいものを感じられてきた会員も多かったのではないのでしょうか。〈やっぱりディケンズっていいよなあ…文学って大事だよなあ〉という「はじめの愛」に私たちを立ち返らせてくれるようなお話でした。ご講演後、会場が温かい興奮に包まれていたのは、そのためだったと思います。

続くシンポジウム「フランス革命とテクストの交差——ディケンズ『二都物語』(1859)とユゴー『九十三年』(1874)におけるキリスト教・神話・思想」では、三名の方にご登壇いただきました。まず、本企画発案者でもある三宅敦子氏が〈フランス革命を主題にした英仏の二作品を比較することでディケンズ文学およびイギリス文学の特性について考える〉という、シンポジウムのねらいについて説明してくださいました。三宅氏は、ディケンズが記したユゴーの人物や邸宅の印象など両作家の関係に触れた後、『二都物語』と『九十三年』の二作品を比較した先行研究から重要な論点を紹介し、過不足のない基調講演的なお話をしてくださいました。なお、今回は会員以外のご出席者も多かったことから、三宅氏はご発表冒頭で、資料を基に両作品の登場人物とあらすじをかいつまんて紹介してくださり、続くお二人のご発表と議論を誰もが理解し、楽しむことができるようにご配慮くださいました。これぞフェロウシップ精神！

指導教官でもある三宅氏からバトンを受け取り、「『二都物語』に使われた引喩とその効果について」というタイトルでお話してくださったのが篠原涼子（すずこ）氏です。篠原氏はまず「間テクスト性」と「引喩」の違いについて説明し、ご発表では間テクスト性ではなく引喩を鍵

として作品にアプローチすることを宣言されたうえで、フランス革命とチャールズ・ダーネイを中心とした登場人物たちの記述に盛り込まれた引喩を、ひとつひとつ丁寧に分析してみせてくださいました。ディケンズ作品の中では短い方にあたる『二都物語』が、聖書、ギリシャ神話、シェークスピア、グリム童話、『千夜一夜物語』など、いかに多彩な書物や物語への引喩が織り込まれた豊穡なテキストであるか提示する一方で、篠原氏はその都度ディケンズ作品の細部に立ち戻り、個々の引喩が物語のそれぞれの文脈でどのように劇的な効果を上げているか説明してくださいました。氏は、テキストの重層性をつまびらかにすることで、カメラになぞらえれば、ぐっと被写体の解像度を上げるような読書を実践してくださったと思います。真摯に作品に向かい合う態度には、篠原氏の熱いディケンズ愛が感じられました。

最後にご登壇くださったフランス文学がご専門の和田光昌氏は、「飛翔する魂、浮遊する 93 年——ヴィクトル・ユゴー『九十三年』における子どもたちの聖バルテルミー」とのお題でお話してくださいました。（ともにフランス革命を扱った『二都物語』と『九十三年』は、クライマックスで主要登場人物が自ら死刑囚の身代わりになって死ぬ点が共通していますが）両作品の最大の違いは、『二都物語』が、フランス革命を舞台とした登場人物間の愛情を主題にした歴史小説であるのに対し、ユゴーの『九十三年』は、同革命以降に生まれた王党派と共和派の対立自体を主題としており〈歴史の暴力を受け入れることは可能か、もしできるとすれば、それはどのようにして可能だろうか〉という問題を考察する思想小説であることだ、と和田氏は初めに述べられます。そして、この問題に対して『九十三年』という作品は、結末での——敵対していた人物たちの魂が死後、互いに混ざり合い、悲劇が生んだ姉妹として飛翔していくという——天上的、靈的（スピリチュエルの）和解とは別に、歴史の暴力へのもう一つの対処法を提示している、と論じられました。その別な解決法が描かれているのが「子どもたちの聖バルテルミーの虐殺」という一章であり、そこで展開する邪気のない（貴重な古書の）破壊と散失のうちに和田氏は、自然による生成という天上への飛翔（結末）とは別なやり方で、歴史の暴力を回避する可能性が示されていると指摘されました。この点に着目すると、歴史の暴力をどう超越するかという問題についてのユゴーの思考の発展過程で、『九十三年』は主軸から外れた独特の位置にあるといえるということです。王党派、共和派双方の血を受け継いだユゴーと英国人のディケンズとでは、フランス革命に対する距離感がまるで違うことがよくわかる、たいへん密度の濃いお話でした。



登壇者陣の魅力とシンポジウム主題（フランス革命と『二都物語』）への関心の高さのゆえで
しょうか、今回の春季総会は 40 名以上の方がお集まりくださる盛会となりました。講演、シン

ポジウムとともに素晴らしい登壇者陣をお集めいただき、ご自身登壇されたうえ、痒いところに手が届くようなアシストやパス出し（サッカーW杯の影響が濃厚な語彙の選択をお許してください）で総会を運営して下さった三宅敦子氏をはじめとして、この度は西南学院大学の皆様のお骨折りのおかげで素晴らしい時間を皆で過ごさせていただきました。登壇者陣、当日運営を助けて下さった学生さん、そして来場された皆さま全員に厚く御礼申し上げます。有難うございました。（なお、懇親会場の料理がとても美味しくて「史上最高では？」との声もあったこと、また金子幸男氏にご設定いただいた二次会も、皆で大いにしゃべり大いに笑い、濃縮した楽しい一時だったことを申し添えておきます。） What larks!

以下に総会での議事の内容をお知らせします。

審議事項

1. 役員交代

任期満了に伴う以下の役員交代が承認されました（**新役員任期は10月からとなります**）。

支部長 松本靖彦（任期満了） → 宮丸裕二

副支部長 宮丸裕二（支部長就任につき退任） → 三宅敦子

理事 矢次 綾（任期満了） → 橋野朋子

『年報』編集長 宮丸裕二（支部長就任につき退任） → 猪熊恵子

2. 秋の「臨時大会」の実施について

年以降、日本支部全体での会合は年間を通じて春季総会一度のみの体制をとってまいりましたが、今後以下の要領で秋季の「臨時大会」の開催も可能とすることが承認されました。

・イギリス文学合同研究会（隔年開催、次は2027年秋）の開催のない年限定で、無理なく発表者、講演者等が確保でき、プログラムが成立する時のみの開催とする。

・年次総会1回の体制は変更なし。春季総会＋秋季例会のように恒常的に秋季イベントの実施をめざすものではない。

2026年度は発表者が確保できているので、以下の日程と会場で実施予定。

2026年10月17日(土) 中央大学 茗荷谷キャンパス

報告事項

1. 前年度会計報告

前年度会計報告の内容については、既に会員あてメーリングリスト(2025年12月10日付)においてもご確認いただいておりますが、今回総会の場において改めて長谷川雅世財務担当理事より

口頭でのご説明、ご報告をいただき、ならびに監査の田中孝信氏の報告書を松本支部長が代読し、ご承認をいただきました。（会計年度と春季総会の開催時期がずれるため、例年この方式をとらせていただいております。）

2. 各種担当者の交代・増員について

日本支部ホームページの以下の項目については、下記の理由で人員補充・追加が求められておりました。

「ディケンズの文献（A Dickens Bibliography）」

理事と兼任が続いた長谷川雅世の後任が必要

「日本におけるディケンズ研究書誌」（更新が滞った状態）

大前義幸（既に主に *Pickwick* をご担当）に加えて増員が必要

上記「文献」「研究書誌」更新作業遂行にあたり、以下の方々に新たにお加わりいただくこととなりました（敬称略）。

一瀬真平 杉田貴瑞 谷 綾子 中越亜理紗 原田 昂

3. 登壇者の執筆および映像の管理と公開の指針について

（宮丸）以下のとおり理事会で方針を決めました。今後はディケンズ・フェロウシップ日本支部の総会・大会等の会合において、登壇して研究発表やシンポジウム、講演等をされる方々について、その報告の執筆と、登壇時の映像の管理と公開の指針を以下のように定めます。会員と非会員の別を問いません。発表者等を募集する前に以下の内容を掲げ、また登壇予定者には事前にこの内容に合意の上で登壇をしていただきます。

○主たる登壇者には必ず事前に発表タイトルと発表の梗概をいただき、それをプログラムに掲載し公開します。また、主たる登壇者と、司会をする方には、必ず事後にディケンズ・フェロウシップ日本支部が発行する『年報』に掲載するための発表報告を書いていただきます（司会者は最低で 400 字、主たる登壇者は最低で 1,000 字ほど）。発表等の登壇を了承された時点でこの点も了承されたものとします。

○大会等で、研究発表やシンポジウム、講演等に登壇された方々の映像はすべてディケンズ・フェロウシップ日本支部が録画し、管理をします。

○録画した映像についてはディケンズ・フェロウシップ日本支部が定めるサイトにて公開をすることが望ましく、ディケンズや当会の活動の周知や成果の記録、今後の活動の活性化のためにできるだけご協力をお願いいたします。一方で、公開を望まない登壇者についてはその映像の公開をしません。あるいは音声のみを公開して頂くこともできます。

○主たる登壇者が映像を公開する場合には、その司会者については映像が必ず公開されるものとして司会をお引き受けいただきます。

○過去の映像についても、公開を希望しない登壇者のものは公開を停止しますのでお知らせ下さい。

○主たる登壇者や司会者には、登壇決定に際して必ず以上の指針をお示しし、了解をいただくことを含めてお引き受けをいただくことにします。

4. 『年報』編集委員長より今年の投稿本数

(宮丸) 次号 49 号の編集作業をつつがなく進めております。今号では投稿論文が 2 本ありました。

5. 来年の総会の日程と場所

2027 年 6 月 5 日 同志社女子大学

(宮丸) 会員の木島菜々子さんのお世話で準備を進めて参ります。

6. 国際大会の開催について

(宮丸) 2028 年 9 月の開催にむけてこれからチームを組んで準備を進めて参ります。

7. SNS での情報発信について

(宮丸) 今後、会員の熊谷さんを中心に始動して参ります。

以上

ディケンズ・フェロウシップ日本支部長 松本靖彦

副支部長 宮丸裕二

